NAI Newsletter No. 15 March 2007　ISSN 0918-7448

人類学研究所 通信

Nanzan Anthropological Institute
南山大学人類学研究所
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18
TEL. 052－832－3111（Ext.580）
2007年3月20日発行
E－mail: nuai@ic.nanzan-u.ac.jp

在りし日の思い出

クネヒト・ペトロ

「一昔」と言う表現がある。振り返ってみれば、私が当時の文学部人類学科から人類学研究所へ移り、第一種研究所員になったのは丁度一昔前のことである。しかし、研究所と関係を持っていたのはもっと前からである。その切っ掛けは、Asian Folklore Studies の創立者でもあり、その長年の編集者であったM.エーデル師の急死であった。その時、南山大学は、今までエーデル師に編集と刊行の責任が任せられた雑誌を、正式に人類学研究所にその出版物として所属させ、私に編集の責任を委ねた。将来、いずれエーデル師から雑誌の編集責任を受け継ぐことに関して、我々の間に既に了解があったものの、その了解事項は余りにも突然に現実になった。編集の方法をはじめ、雑誌の運営に関して何の具体的な知識や経験もなかった私にとっては、まさに晴天の霹靂のような出来事であった。幸いに、エーデル師が最後に手をつけていた号の原稿が揃っていたので、私にとっては本番になるまで、執行猶予が与えられていた（ｐ２へ続く）。

目　次

在りし日の思い出　クネヒト・ペトロ　1
ろう者と手話の文化人類学：その必要性と課題　亀井信孝　3
研究所の活動・その他　１０

ところが、その原稿に私の感じで英語があまりにも不自然なものがあったので、敢えてそれを幾らか訂正することにしたけれども、著者が著名な方なので、恐れながら手を加えた上で訂正した論文を確認してもらうために著者に送った。どういう反応だろうかを心配しながら返事を待っていた。その返事は大変理解深くて、丁寧なものだったので、大いに驚いて、ほっとした。この著者は松前健先生であった。以来、松前先生は最後まで雑誌とその未経験の編集者である私の貴重な支持者であった。

編集作業がぶっつけ本番の形で始まったのに、松前先生との出会いは、私にこの作業に関するまだ些細なものであった自信を芽生えさせてくれた。もう一つの問題は出版に関する技術についての無知であった。後に特に研究社印刷の平野肇氏に多くのことを教えていただいたが、最初に基礎的知識を英国人らしいヒューモアを込めて提供してくれたのは、Monumenta Nipponica の編集者、Michael Cooper 師であった。豆知識だったが、そのお蔭で私の責任で雑誌の次の号が無事に発行された。

このような形で、さしあたって最初のハードルを飛び越せた。雑誌の存続自体がそれらの事情で保証された感じだったが、松前先生の原稿を訂正して以来、念頭に見え隠れしたのは英語表現の問題であった。当分の間アメリカ人の同僚に助けてもらえることがあったが、かれに余り負担を掛けてはいけないとそろそろ思ったところで、ある日、編集室に赤ひげの外国人が現れた。Asian Folklore Studies の編集等について感心深く色々と訪ねた。自分は日本文学の研究者だが、民俗学に大いに関心があると言って、若し、必要なら喜んで手伝ってあげると申し出た。私にとって、瓢箪から駒のような話を断るわけにはいかなかった。何故なら、夢にも思わなかった形で、英語表現の問題が解決したからであった。本当に運が良かったと喜んだ。その時、助けの手を差し伸べてくれたのは Michael Kelsey 氏であった。彼は雑誌の歴史において画期的な役割を果たす方になった。彼はやがて、雑誌の最初のコピー・エディターになり、その作業の合理化を図って、最初のコンピューターを購入する動因にもなった。

カトリックのフォークロアでは、マイケルはドラゴンを殺して、困った人を解放してくれる大天使である。二人のマイケルは、未経験の私のために実に助けの天使になってくれた。雑誌が難所に直面している現在にもまた、このような「助けの天使」が都合よく現れることを願ってはやまないのは私の本心である。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇
◇　◇　◇　◇　◇　◇

ろう者と手話の文化人類学：その必要性と課題

亀井伸孝（関西学院大学社会学研究科・COE 特任助教授）

（おことわり）本稿は、2006 年 7 月 14 日に南山大学人類学研究所講演会「障害と障害者の文化人類学」シリーズの一環として行われた発表「アフリカろう者のフィールドワーク：手話を通して見えてきたもうひとつの歴史」の一部に加筆したものです。発表内容の大部分はすでに単行本（亀井，2006a）として刊行されたため割愛し、研究の意義と展望に関わる部分を本誌に寄稿させていただきました。また、ほぼ同じ時期に開催された現代人類学研究会「特集・実践の人類学」における発表と議論（亀井，2006c）の一部を反映しています。

■はじめに

「ろう者と手話を文化人類学のテーマとする」ということは、斬新な試みだと思われる向きもあるかもしれない。確かにそれは、世界的にも比較的最近に開拓され、まだ十分な民族誌の蓄積がなされていない領域である。さらに日本では、その海外の研究動向の全体像が体系的に紹介されてこなかったという事情もある。この小論では、この領域の研究に取り組む必要性と課題とをまとめ、今後の研究振興のためのアイディアを述べてみたい。なお、海外のろう者研究の動向に関するレビューについては Senghas & Monaghan（2002）が詳しく、日本語では筆者が簡潔なレビューを発表したことがあるが（亀井，2006b）、より詳細な別稿を現在準備している。

■ろう者と手話

はじめにろう者と手話を定義しておきたい。世界各地の耳の聞こえない人びとの集まりが、手や顔の表情を用いた視覚的な言語を話していることが知られている。これら視覚的な諸言語を「手話言語（手話）」と総称し、手話言語を話す耳の聞こえない人たちを「ろう者」と呼ぶ。一方、音声を用いた諸言語を「音声言語」と総称し、音声言語で話す耳が聞こえる人たちを「聴者（健聴者）」と呼ぶ。

最も重要なことは、手話は固有の文法をそなえた言語であり、ジェスチャーなどの身体表現とは似て非なるものだということである。その文法も同じ地域の音声言語から派生したものとは限らず、通常は独自の文法をそなえている。これら手話言語は耳の聞こえない人たちの集まりの中で自然発生し、その世代

間で伝承されていく中で歴史的に形成された諸自然言語であり、世界では少なくとも 119 種の手話言語が話されている。さらに、イギリス手話とアメリカ手話が別べつに成立した異なる言語であるように、手話言語の分布は音声言語分布と必ずしも一致していない。手話の世界には独自の世代間伝承や地域間伝播の歴史があり、それらは音声言語の世界観から類推することはできないのである。

ろう者の手話言語は、まぎれもなく人類の言語文化の一角を占める諸自然言語である。人類の言語について語るとき、音声言語だけではなく手話言語を含めてあつかうということは、今や最も基本的な認識となりつつあるといってよいだろう。

■ろう者コミュニティと文化

各地のろう者は、手話という言語を話す者どうし深い結びつきをもっていることが多い。交友関係、社会的活動、スポーツや趣味のサークルなどでろう者たちが集まり、ろう者どうしが結婚することが多い地域もある。このような言語を同じくするろう者の社縁的、血縁的な集まりを「ろう者コミュニティ」と呼び、ろう者コミュニティのメンバーに共有されている文化を「ろう文化」と呼ぶ。ろう文化には、慣習や価値観など広い意味での文化と、芸術や学術活動などの狭い意味での文化のどちらもが含まれている。

なお、ここでいうろう者の「文化」は、社会学系の障害に関する議論などでしばしば見られる「障害は文化によってつくられる／文化依存的な概念である」といった文脈での「文化」とは使い方が異なっていることに注意しておきたい。社会学系の研究が、非障害者を含む全体社会における文化要素（障害観、障害者カテゴリー、表象、意味など）に大きな関心を寄せるのに対し、文化人類学的観点におけるろう文化研究は、ろう者の集団内で共有されている具体的な生活・行動様式をあつかっている。聞こえない人びとが集まりをなし、そこで手話言語が共有されると、その言語集団特有の価値観、慣習、物語、知識、歴史観、分類体系、世界観、帰属意識などが生まれ、これら文化要素が相互に結びついて文化複合が形成され、こうした生活・行動様式に根ざした芸術・学術活動が手話で行われるようになる。『文化人類学事典』では「文化」を第一義的に「特定の社会の人々によって習得され、共有され、伝達される行動様式ないし生活様式の体系」と定義しているが（石川ほか編，1994）、そのような文化の一般的定義に照らして、これら諸現象を「ろう者の文化（ろう文化）」と総称しているのである。

■古典的な「文化」の定義の有用性

ここでろう者の文化を定義するにあたり、古典的な「文化」の定義に従った。むろん「文化」概念をめぐっては、一世紀以上にわたって議論が重ねられてきている。にもかかわらず、なぜ今頃この古い定義にさかのぼるべきなのだろうか。その理由は、ろう者たちの間で見られる営みが古典的な定義に照らしても文化であることが明らかであるにもかかわらず、いまだにそのような認知を一般的には受けていないからである。

かつてひとくくりに「未開」とされていた非ヨーロッパ世界の営みが、「文化」と名付けられることで対象化され、それらを実証的に理解しようとする試みが始まったのと同じように、今日の私たちはろう者たちの営みを「文化」と名付けることで、人類学の認識の地平にのせようとしている。私たちは研究の上での「一世紀の遅れを取り戻す」ことから始めざるを得ないがゆえに、古典的な文化概念から出発するのが適しているのである。

現在のろう者の人類学は、かつてボアズ門下の人類学者たちが世界に飛び出していった時代状況のごとくであると言われる（Senghas & Monaghan, 2002）。この初期段階における人類学の役割とは、いきなりポストモダンの言説の迷宮に迷いこむことではなく、フィールドワークと文化相対主義に基づいた実証的な民族誌を蓄積し、議論の素材を収集することにあるだろう。ろう者の研究は、まずはきわめて古典的な人類学的作業を求めているのである。

■ろう者研究の困難さ

とは言うものの、ろう者の文化の研究を行うことは、現状では非常に困難なことである。その困難さは三点にまとめられる。(1) 方法上の困難さ、(2) 倫理上の困難さ、(3) 認識上の困難さである。

まず、方法上の困難さである。ろう者の文化について学ぶには、彼ら／彼女らが話している言語である手話を学び、その手話によって参与観察やインタビューを行うことが欠かせない。ここで立ちはだかる壁とは、「手話を話せる文化人類学者がほとんどいない」という事実である。その理由は明らかでないが、おそらく「手話は社会福祉分野のものであって、文化とは関係がない」という先入見があることが考えられる。学術レベルの議論ができるほどの手話の語学力がなければ、ろう者の研究を進めることは難しい。

次に、倫理上の困難さである。ろう者は言語的・文化的集団である一方、耳が聞こえないことで、聴者の市民がふつうに享受している権利や資源を奪われがちな人々である（秋山・亀井, 2004）。権利運動というかたちで現状の変革を求めるろう者のニーズに対し、ありのままの現状を学んで描こうとする民族誌的研究は時としてそぐわないケースがある。もっとも、それらが協働可能であることについては本論の後段で示すつもりである。

そして、認識上の困難さである。仮に上記二つの問題をクリアしてろう者の研究に取り組むことができたとしても、一般にそれは福祉・医療をめぐる領域のものであると見なされ、言語・文化の研究と認知されにくい現状がある。ろう者の言語、文化、歴史に関する書籍が刊行されているが、書店では「言語学」「文化人類学」「歴史」のコーナーではなく、すべて「福祉」の所に置かれていることが、このことを象徴的に物語っているだろう。

これらの要因が相互に原因となり結果となって、文化人類学の中のろう者というテーマは、かぎりなく周辺に置かれてきた。しかし、先の文化の定義に照らしてみるかぎり、世界各地のろう者の文化の存在を否認することはもはやできず、正しくそれに向き合うことが人類学に求められている。つまり、これらの困難さを乗り越えるための方法と倫理とを新たに開発することが望まれている。

■ろう者研究＝応用／実践系の人類学？

ろう者に文化があることを認めるならば、それが研究対象となることについては、文化人類学者にとってはさほど異論がないであろう。では、その研究を遂行することは、学問の社会貢献という立場からはどのように評価されるだろうか。ここでは基礎研究と応用／実践研究の両面について考えてみたい。

私が「アフリカでろう者の調査をしています」と言うと、「応用／実践系の人類学ですね」と受け止められることがしばしばある。誤りではないが、それは私の研究の半分を言い当てているにすぎない。

一般には「ろう者＝問題＝解決が必要＝応用／実践系」という回路で理解されているかもしれないが、私の認識の出発点としては、ろう者と手話言語は「問題」ではなく「状態」である。冒頭で述べた通り、世界119種類の手話言語は、地球上に分布する人類の諸自然言語の一部であり、ろう者はそれらを話す言語集団である。つまりそれ自体、通常の地域研究（文化人類学やフィールド言語学を含む）の一環において理解されうるものであり、「ふつうのエスノグラフィー」の対象となりうるものである。

一方、ろう者と手話言語をめぐる問題は、多くの資源が音声言語集団に占有されていることによって生じている。ろう者における人間開発、人間の安全保障の諸問題は、その言語集団の特性を十分ふまえた解決方法を必要とする。文化相対主義に基づいた微視的なエスノグラフィーは、異文化コミュニケーションを円滑にする啓発的な役割を担うだろうし、政策立案にも貢献するだろう。

(1) 地域研究におけるろう者・手話言語に関する知見の蓄積（百科事典、データベースの作成）

(2) 問題解決手段としてのろう者・手話言語に関する知見の活用（教科書作成、

教育や啓発への応用)

ろう者の人類学は、この二つの使命をもっており、どちらも欠くことはできないと考える。ある人類学の研究が「応用／実践であるかどうか」は、対象によって決まるのではなく、知識の使用目的によって決まるはずである。ろう者の文化に関する基礎研究と応用／実践研究の双方が、バランスよく振興されることが望ましいだろう。人類学の実践的な活用が唱えられる今日、ろう者の人類学はその一つのモデルとなりうるのではないだろうか。

長い間、音声言語社会への無理な同化を強いられ、言語的な抑圧を受けてきたろう者に対し、研究者や学習者がその文化だけを学んで楽しむという関わり方は、倫理的に受け入れられにくい可能性がある。一方、手話通訳者育成や手話学習、学生・生徒や一般市民対象の人権啓発などの場面で、ろう者と手話について正しく学ぶにあたっては、文化の要素を含めることが今や欠かせないし、異文化理解とコミュニケーションのプロである文化人類学者のセンスは、それを効果的に行うことに貢献できるだろう。学問がこのような努力を払うことで、ろう者の現状変革のニーズと文化研究はよい協働的な関係に位置づけられるものと期待している。

■手話で構造主義--手話を話せる人類学者の育成

学問の倫理性をクリアしたとしても、人類学者が手話を話すことができないという現状が続くかぎり、この領域の振興をはかることはできない。手話で調査ができる人材を増やしていく必要があるが、そのためには二つの方向性が考えられる。(1) 人類学者が手話の勉強をする、(2) ろう者の人類学者を育成する。

一つ目の方法は、大学カリキュラムの創意工夫によって達成できる可能性がある。たとえば、文化人類学教育や一般教養科目の中に手話を語学科目として選択肢に含めれば、その機会を活かし、異文化理解の視角をもってこの領域に挑戦する若い研究者が現れるかもしれない。現在の日本の大学で、手話の科目を開講している大学はごくわずかにすぎないが、こうした発想の転換が新しい学問領域の深化に大きく関わるだろう。

二つ目の方法は、手話を第一言語とするろう者たちを文化人類学の分野に迎え入れ、研究に取り組んでもらうという方法である。語学として手話を学ぶ必要がある聴者に比べ、ろう者はその時間と労力とを節約することができ、かつ聴者の人類学者とは異なった視点での民族誌を書くことができるだろう。ただし、ろう者を学問の世界に受け入れるためには、大学や学会におけるバリアフリーの対策（手話通訳者の用意など）を講じることが不可欠であり、またたとえば難解な構造主義人類学の講義などもきちんと同時通訳できるような知識・

技能をもった手話通訳者の育成と確保も欠かせない。

■手話と高等教育のよりよい関係を

アメリカでは、すでに幾人ものろう者が人類学者として活躍している。また、聴者の人類学者も手話を学んでフィールドワークを行い、ろう者の研究者と共同研究を行ったり、手話を使用言語とする学会や研究会を開いたりしている。

その背景には、手話と高等教育の密接な関わりの歴史がある。アメリカには、手話で講義を行うろう者のための大学・大学院があり、一般の大学でもろう者の学生が希望すれば手話通訳が用意され、聴者の学生が手話の語学科目を選択できる大学も多い。手話を学術の言語として活用するという制度的な裏付けがあればこそ、ろう者による研究活動が振興され、文化人類学的な成果が生まれ、そしてろう者に関する正しい理解も社会に浸透していくのである。

日本においてはどうだろうか。国立の筑波技術大学（茨城県つくば市）は、ろう者・難聴者のみを学生として受け入れる学部をもっている。現在は理工学系の専攻のみで構成され、人文・社会科学系の専攻をもっていないものの、手話を学術分野の使用言語として育てていくためには重要な拠点であるだろう。また、日本手話研究所など、ろう者中心の民間の研究機関、団体が複数できている。日本手話を大会使用言語とする学会としては、日本手話学会と日本聾史学会があり、特に後者は手話のみを使用言語として営まれる国内唯一の学会である。文化人類学界は、将来的に研究協力を結べる学術機関・団体を見いだすこともできるかもしれない。

ろう者が人類学の分野にいっそう参入することを実現するためには、ろう者の側の意欲と挑戦が重要なのはもちろんだが、文化人類学に関わる大学や学会が今後すすんでバリアフリーのための努力を払うことができるかどうか、ろうという異なる文化、手話という異なる言語を受け入れる寛容さをもてるかどうかにかかっている。ろう者の文化人類学者たちが中心となり、日本手話を使用言語として進められる、文化人類学の学術大会の開催。そういう状況が見られる日はくるだろうか。

■もうひとつの「バベルの塔」へ

一般に、音声言語の多様性の魅力と困難さとに直面してきた聴者たちは、手話とろう者に対して「みぶりで通じ合える魅力的な世界なのではないか」というようなイメージを投影することがある。しかしこの期待が無用なオリエンタリズムであったことはすでに明らかになってしまった。実際に手話とろう者の世界に入ってみれば、国により地域により手話は異なっており、そこには複雑きわまりない多言語世界が成立している。聴者が手話を学ぶことは、「言語の多

様性の煩雑さから逃げ出すこと」ではなく、「もうひとつのバベルの塔に迷い込む経験」にほかならない。

もちろん、人間社会の多様性を煩雑なものととらえる立場においては、手話の複雑さや難解さは「期待はずれ」ということになるかもしれない。しかし、差異に出会い多様性を学ぶことに喜びと達成感を見いだす者にとっては、魅力ある多言語世界への入り口である。言うまでもなく、人類学は後者の道を歩むことを使命としてきたはずである。異文化理解の老舗は、他の学問分野に率先してこの領域に取り組むことができるだろうか。異なる他者への寛容さを誇りとする分野に、できないはずはないと私は期待している。

秋山なみ・亀井伸孝. 2004.『手話でいこう: ろう者の言い分 聴者のホンネ』京都: ミネルヴァ書房.

石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男編. 1994.『文化人類学事典』東京: 弘文堂。

亀井伸孝. 2006a.『アフリカのろう者と手話の歴史: A・J・フォスターの「王国」を訪ねて』東京: 明石書店.

亀井伸孝. 2006b.「世界の危機言語: アメリカ人類学会第 104 回年次大会分科会報告」『手話コミュニケーション研究』(日本手話研究所) 59 (2006.3): 62-69.

亀井伸孝. 2006c.「ろう者の人類学の二つの使命」現代人類学研究会第 40 回研究会「実践の人類学」特集 (2006 年 7 月 23 日, 東京都目黒区, 東京大学).

Senghas, Richard J. & Leila Monaghan. 2002. Signs of Their Times: Deaf Communities and the Culture of Language. In: *Annual Review of Anthropology* 31: 69-97.

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

◆研究所の活動◆
(2006年1月1日－12月31日)

◎ 南山大学人類学研究所第8期長期研究プロジェクト『コロニアル、ポスト・コロニアル状況下の社会変容と宗教の再選択』

△研究会の開催

第一回　2006年7月29日（土）

森部一「タイの開発僧の思想の特徴とその問題点――主として北タイのプラ・テープカウィに焦点を当てて」

吉田竹也「観光の選択？宗教の選択？－バリの社会と宗教の現状をめぐって」

第二回2006年10月28日

河邉真次「改宗に伴う社会変化と開発－中央アンデスにおけるプロテスタント諸派の布教戦略を中心に－」

宮沢千尋「コロニアル状況から生まれ出でたカオダイ教の軍事化と政治化」

第三回2006年12月2日

石原美奈子「エチオピア帝国の形成と異教共存－皇帝・霊媒師と踊る精霊たち」

◎講演会

シリーズ「障害と障害者の文化人類学」

企画意図：文化人類学は、もともと西欧の近代文明によって支配されマイナーな立場におかれた諸文化の価値の追求をひとつの任務にしてきたが、1980年ごろから、現代社会の中でのマイノリティーや先住民の問題にも目を向けるようになった。そうした流れの中に立ってみると、多様な生活様式を持つ諸個人の生存を可能にした現代社会の中で、障害や病気を持つ人々のあり方をふり返ることは必然的なことであり、今日私たちは障害を持って生きることを、健常者から見た何らかの「欠損」としてではなく、固有の文化的可能性の実現と見ることが可能であり、また必要なのではないか。

第一回：2006年7月7日(金)午後5時00分～7時00分
場所：南山大学名古屋キヤンパスJ棟1階Pルーム
講師：市田泰弘氏(国立身体障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科教官)
演題：「言語としての手話、文化としてのろう」

第二回：2006年7月14日(金)午後5時00分～7時00分
場所：南山大学名古屋キヤンパスKB1教室
講師：亀井信孝氏（関西学院大学社会学研究科　ＣＯＥ特任助教授
演題：「アフリカろう者のフィールドワーク―手話を通して見えてきたもうひとつの歴史」

第三回:2006年10月13日（金）午後5時00分～7時00分
場所：南山大学名古屋キャンパスJ棟1階Pルーム
講師：広瀬浩二郎氏（国立民族学博物館　民族文化研究部　助手）
演題：「ひらけ豊かな触生活！－博物館から始まるフリーバリア社会—」

第四回：2006年11月10日（金）午後5時00分～7時00分
場所：南山大学名古屋キャンパスJ棟1階Pルーム
講師：杉野昭博氏（関西大学社会学部教授）
演題：「障害と文化的障壁—障害学と文化人類学の接点をさぐる」

◎映画上映会「人類学的映画講座
ベトナムから見たベトナム戦争」
第一回　2006年5月19日
「コウノトリの歌」
第二回　2006年12月15日
「インドシナ激戦史－要塞ディエン・ビエン」

◇　◇　◇　◇　◇

◎ 研究所員の活動

○坂井信三（人類学研究所所長）
◇ 論文
「スーフィー・タリーカと儀礼結社」
『「布教」と「改宗」の比較宗教学的研究－モダニテイ・宗教・コロニアリズム』(課題番号：15320014)平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書平成18年3月。研究代表者関一敏(九州大学大学院人間環境学研究院教)33-46
◇講演
－2006年2月27日異文化理解講座「アフリカ・サヘル地域を知ろう第7回西アフリカの歴史とイスラーム」国際文化交流推進協会
－2006年6月3日豊明市民大学講座「フィールドからの報告」豊明市
◇科研費。平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究課題「西アフリカの歴史的文明の形成と展開過程に関する歴史人類学的研究」（課題番号：18401041）研究代表者坂井信三
◇フィールドワーク（2006年12月12日～2007年1月7日）上記科研費による研究の一環として、マリ共和国、ガオ、ベンチャ周辺セムスリム墓地の分布調査およびアラビア語墓碑の調査

○宮沢千尋
◇ 論文
－「クオンデ侯と全亜細亜民族会議長崎大会　東遊運動瓦解後のクオンデの思想と行動（5）」『ベトナム—社会と文化』7号　80－109　風響社
－「ヴェトナムの家譜研究—現状と課題」『系譜の比較史』（仮題）（印刷中）刀水書房
—「社会主義市場経済化による農業

の造変容」(課題番号:1312320)2001年度～2005 年度科学研究費補助金(特定領域研究)「アジア法整備支援－体制移行国に対する法整備支援のパラダイム構築－」 研究代表者 鮎京正訓(名古屋大学法政国際教育協力研究センター教授) 報告書（印刷中）

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ASIAN FOLKLORE STUDIES

Volume LXV, 2006

ARTICLES

On the Wings of a Bird: Folklore, Nativism,
and Nostalgia in Meiji Letters ..... Charlotte EUBANKS 1

Pipit Rochijat's Subversive Mythologies:
The Suharto Era and Beyond ..... Marshall CLARK 21

Homo narrans in East Java:
Regional Myths and Local Concerns ..... Robert WESSING 45

The Fox in World Literature:
Reflections on a "Fictional Animal" ..... Hans-Jörg UTHER 133

Myths and Traditional Beliefs about the Wolf
and the Crow in Central Asia: Examples from
the Turkic Wu-Sun and the Mongols ..... NAMU JILA 161

Preaching the Animal Realm in
Late Medieval Japan ..... R. Keller KIMBROUGH 179

Symbolic Animals in the Land between the Waters:
Markers of Place and Transition ..... Robert WESSING 205

Embodying Evil and Bad Luck: Stray Notes on
the Folklore of Bats in Southwest Asia ..... Jürgen Wasim FREMBGEN 241

Culture and Knowledge of the Sacred Instrument
Qeej in the Mong-American Community ..... Yer J. THAO 249

Ema Shū's "The Mountain Folk":
Fictionalized Ethnography and Veiled Dissent ..... Scott SCHNELL 269

REVIEW ARTICLE

Narrative "Lore" and Legend from Saurashtra (India):
Gems Waiting to be Polished ..... Sanjay SIRCAR 323

RESEARCH material

Symbolism of Hairstyles in Korea and Japan ..... Na-Young CHOI 69

OBITUARY

Walther Heissig (1913–2005): In Memoriam ..... Erika TAUBE 87

COMMUNICATIONS

Correction 95
Announcement 95

BOOK REVIEWS

GENERAL
The Types of International Folktales: A Classification and Bibliography, Based on the System of Antti Aarne and Stith Thompson. By Hans-Jörg Uther. (Sadhana Naithani) 97

Ten Traditional Tellers. By Margaret Read MacDonald. (Art Leete) 339

JAPAN
Tsukiji: The Fish Market at the Center of the World. By Theodore C. Bestor. (Scott Schnell) 98

KOREA
And So Flows History. Translated by Young-Key Kim-Renaud. By Moo-Sook Hahn. (Michael J. Pettid) 100
Voices from the Straw Mat: Toward an Ethnography of Korean Story Singing. By Chan E. Park. (Boudewijn Walraven) 101

CHINA
Perspectives on the Yi of Southwest China. Edited by Stevan Harrell. (Kenji Sano) 103

Samanjiao tushuo [Shamanism illustrated].
By Huang Qiang and Se Yin. (Tatiana A. Pang) 106
Indigenous Writers of Taiwan: An Anthology of Stories, Essays & Poems.
Edited and translated by John Balcom and Yingtsih Balcom. (Erika Kaneko) 340
The Sacred Village: Social Change and Religious Life in Rural North China.
By Thomas David DuBois. (Benjamin Penny) 344
L'interdit du bœuf en Chine. Agriculture, éthique et sacrifice.
By Vincent Goossaert. (Catherine Capdeville-Zeng) 346
The Sinister Way: The Divine and the Demonic in Chinese Religious Culture.
By Richard Von Glahn. (Neil Edward McGee) 349

VIETNAM
LangBiang no jiseki: Betonamu chūbu shōsūminzoku no kodenshō.
By Lam Tuyen Tinh, translated and annotated by Honda Mamoru.
(Nguyen Anh Phong) 351

CENTRAL ASIA
Huzhu Mongghul Folklore: Texts and Translations and
Huzhu Mongghul Texts: Chileb 1983–1996 Selections.
Edited by Jugui Limusishiden and Kevin Stuart. (Arienne Dwyer) 108
Volksmärchen der Mongolen. Aus dem Mongolischen, Russischen und Chinesischen übersetzt und herausgegeben. By Erika Taube. (Ágnes Birtalan).... 112
Geheimnisvolles Tuwa. Expeditionen in das Herz Asiens. By Sew'jan I. Weinshtein.
(Peter Knecht) 114

TIBET
Tibetan Childhood. By Gongboo Sayrung (author), Losang Sodnum and Tsepakgyap (illustrations); *Jahzong: Tibetan Tribal Hero.* By Guhruh (author) and Tsepakgyap (illustrations); *Tibetan Village Wedding* (DVD), *The Perfection of Wisdom* (DVD), *Tibetan Woman's Life* (DVD). By Puhua Dongzhi.
(Gerald Roche) 356

INDIA
Wall Paintings in North Kerala/India: 1000 Years of Temple Art. By A. Frenz and K. K. Marar. (Beatrix Hauser) 123
Rasa: Performing the Divine in India. By Susan L. Schwartz. (Konishi Masatoshi A.)
..... 125

Santalia: Catalogue of Santali Manuscripts in Oslo. Compiled by Sagram Santosh Kumar Soren. (Nita Mathur) 358

PHILIPPINES

Shamanism, Catholicism and Gender Relations in Colonial Philippines, 1521–1685. By Caroline Brewer. (Makito Kawada) 116

SOUTHEAST ASIA

Salako or Badameà: Sketch Grammar, Texts and Lexicon of a Kanayatn Dialect in West Borneo. By Alexander K. Adelaar. (Clifford Sather) 119

Cultural Citizenship in Island Southeast Asia: Nation and Belonging in the Hinterlands. Edited by Renato Rosaldo. (Saito Chie) 121

INDONESIA

Longing for the House of God, Dwelling in the House of the Ancestors: Local Belief and Christianity, and Islam among the Kéo of Central Flores. By Philipus Tule. (Eriko Aoki). 353

NEAR EAST

Studies on Arab Epics: Oriente Moderno. Edited by Giovanni Canova. (Ahmad A. Nasr) 360

Folklore and Folklife in the United Arab Emirates. By Sayyid Hamid Hurreiz. (Daniel Martin Varisco) 362

年間購読料：6000 円（団体）、3000 円（個人）
購入や投稿に関するお問い合わせは以下へお願いします：

南山大学人類学研究所 Asian Folklore Studies 編集室
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18 番地
Tel: (052) 832-3111 （南山大学代表）
Fax: (052) 833-6157
e-mail: nuai@ic.nanzan-u.ac.jp